

ポルカドット号探検記

香取秀真と百竹亭

松本市美術館館長 小川 稔

四方を山に囲まれる地形は、ともすると閉塞感が促されると思われるが、むしろ、個性的な文化の醸成・保護に適する特権もあるのではないか。かつてこの松本平で、著名な文化人らの交流があったことを思い出す。その中心にいたのが松本の商家に生まれた実業家池上喜作号・百竹亭、1890-1978だ。若い頃から文芸に親しみ、特に正岡子規の俳句・短歌革新運動に共感、傾



左から胡桃沢勘内、香取秀真、秀真妻、池上喜作（1936年1月11日浅間富貴之湯にて）

倒し、その周辺の文学者、美術家たちと親交を深めて作品資料を蒐集した。今秋当館の特別展では、喜作と特に親しかった香取秀真を紹介する。秀真は一般には鑄造を専門とする金工作家、金工史研究者として知られるが、同時に正岡子規門下の歌人で、歌会始の召人も務めている。子規への共通の思いが喜作と秀真を結んだのだろう。

秀真の妻が信州人でもあり、戦時中当地に逗留、この間、喜作や同じく松本の文化人・胡桃沢勘内と上高地を訪れたり、地域の寺社の美術作品調査、歌集の編纂などを行っている。

子規の弟子筋の俳人、歌人、美術家らを招きもてなしたこと、その交友から生まれた独自の地域文化があったことを忘れてはならないだろう。集められた工芸作品、書画は当館の池上百竹亭コレクション展示室で常時展示されている。

戦時中、全国の寺院の梵鐘が供出され鑄潰されたことに胸を傷めた秀真は戦後、平和を祈り、子息の正彦氏とその復元に当たった。市内の牛伏寺、正麟寺等にその作品が遺されている。

香取秀真(1874-1954)



香取秀真(1874-1954)は、金工作家です。金工とは金属工芸のことで、銅や鉄、真鍮などの金属を使った作品のことを言います。この

度、秀真の生誕150年、没後70年という記念の年に、ゆかりの地・松本で珠玉の作品が一堂に会した展覧会を開催します。

秀真は千葉県に生まれ、1892年に東京美術学校(現・東京藝術大学)に入学します。卒業後はパリ万国博覧会など多くの展覧会で受賞を重ねました。秀真が生涯にわたり用いた技法は「鑄金」です。金属工芸の技法の一つで、溶かした金属を型に流し込み、冷却し

て取り出した後、表面を研磨等して仕上げる方法です。秀真は主に銅を使っています。花瓶や香炉、置物や鏡などを制作しました。また、鉄を使って鉄瓶や茶釜も作っています。

東洋や日本の古典の文様や形、また古来の金工品の研究もしていた秀真は、それらを通して、伝統を生かしながらも時代感覚を取り入れた、格調高い作品を制作しました。過度に装飾せず、また鑑賞用ではなく実用のための作品、すなわち用と美を兼ね備えた作品を生み出したのです。1953年には工芸家として初の文化勲章を受章しました。

妻が現在の長野県塩尻市出身であったことから松本へ訪れる機会も多く、1944年には松本市郊外に疎開し、約3年間を過ごしました。疎開先では、家人たちと温かな交流を持つ日々を送っています。また、松本市の文人・池上喜作(号・百竹亭)らとの親交は深いものでした。秀真は正岡子規門下のアララギ派の歌人としても活躍



3



2



5

Relay Essay

表情豊かな金属

当館学芸員 藤原 裕希

自室の棚の一角に、数年前から気に入ったものを集めて飾っている。それは文具であったり置物であったり、アクセサリーなど、種類も用途も様々であるが、とにかく自分が「良いな」と感じたものをコレクションして楽しんでいる。

そうした「わたしのお気に入り」たちの中で、最近金工品が増えてきた。例えば、好きな形、大きさに変形させることができる錫製のバングルや、クラフトフェアで一目惚れをして購入した真鍮の指輪。そして、青く着色された銅製の小さなトレイなどである。どれも大切な宝物ではあるが、中でもトレイには思い入れがある。

このトレイは、わたしが大学生のときに金工体験として作ったもので、青く「着色された」と言ってもトレイに青色の塗料を塗った「着色」ではなく、銅の腐食性を利用した伝統的な技法によって着色されているのが特徴だ。この技法での着色は、制作工程のうちの「焼き」や「磨き」などの、1つの加減で色の発色具合が変化するため、均一な青色ではなく、発色せずに黒い地の色のままとなった部分も残る。しかし、それによって青色の濃淡と地の色が混ざりあった独特の模様が浮かび上がり、唯一無二の作品となるのだ。

さて、話がかわって当館では10月12日(土)より、金工作家・香取秀真の展覧会が開催される。作品には主に銅と鉄が用いられており、伝統的な文様や形を基としつつも、実用性と形状の美しさを重視したつくりは、秀真の金工に対する豊富な知識と技術から生み出された。

同じ金属であってもその種類によって大きく特徴は異なり、その特性を理解し、加工をすることで、様々な表現に繋がっていく。金工によって広がる金属の多様な表情に、わたしは最近魅了されている。

ART FUL

2024.10 | 79

松本市美術館 NEWS [あーとふる]

- 1. 香取秀真
- 2. 《瑞花瑞鳥文鍍銅八棱鍾》京都国立近代美術館蔵
- 3. 《鴛鴦文銅花瓶》佐倉市立美術館蔵
- 4. 《竹の画》(部分)松本市美術館蔵
- 5. 《鳩香炉》千葉県立美術館蔵

この秋、工芸のまち・松本で、香取秀真の作品をぜひお楽しみください。

Commemorating the 150th Anniversary of the Artist's Birth and the 70th Anniversary of his Death

Master of Metalwork, Katori Hotsuma

生誕150年/没後70年

金工の巨匠 香取秀真展

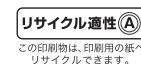
会 期 / 2024年10月12日(土)~12月1日(日)

休 館 日 / 月曜日(ただし、休日の場合は翌平日)

開館時間 / 9時~17時(入場は16時30分まで)

観 覧 料 / 大人1,200円、大学高校生と70歳以上の松本市民800円

※中学生以下無料、障がい者手帳携帯者とその介助者1名無料
※20名以上の団体は各200円引き ※オンラインチケットによる購入は100円引き
※大学高校生と70歳以上の松本市民は、観覧当日、証明書(学生証、免許証等)の提示が必要
主催:松本市美術館 共催:SBC信越放送、信濃毎日新聞社、市民タイムス、MGプレス
協力:茶道裏千家淡交会長野県支部中信分会



松本市美術館
MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART

〒390-0811 長野県松本市中央4-2-22
tel 0263-39-7400 fax 0263-39-3400
https://matsumoto-artmuse.jp

松本市美術館公式 SNSはこちらから▶



X

Instagram

視る

《靴をはいて野にゆこう》

当館学芸員 瀧田見彰

草間彌生は1929年、松本市に生まれ、花園に囲まれた少女期を過ごす。1957年、28歳で単身渡米。網目、水玉といった独自のイメージを確立し、約16年間ニューヨークを中心に活動するも、心身の不調により1973年に帰国。1970年代の作品は「死」を想起させるものが多く存在するが、同時期に制作を開始した版画作品は、それらと対極にあるような華やかなモチーフが色彩ゆたかに表現され、生命力に満ちている。同時進行する生と死のイメージは、表現方法の柔軟さを示しつつ、一方でそれらの境界を行き来する草間の葛藤を想像させる。

本作は初期の版画作品である。靴は網目に覆われ、靴紐は植物の茎であろうか。柔和な色彩は、花園で過ごした穏やかな少女時代の記憶の断片のよう。原画の水彩の濃淡を、6つの版を用いて見事に表現している。1980年代以降の作品は、版画での刷り上がりや構成を意識し、色数を限定し、



©YAYOI KUSAMA

常同反復によるイメージの増殖が創作活動の根幹にあった草間と、複製芸術である版画の出合いは必然だったのかもしれない。それまでの画面上、または同一空間でのイメージの増殖であったものが、版画作品の登場により、草間自身の手を離れた増殖を可能とした。450種、3万部に及ぶそれは、草間の壮大な創作活動におけるもうひとつの小宇宙のようである。

作者…草間彌生
作品名…靴をはいて野にゆこう
技法・材質…シルクスクリーン・紙
制作年…1979年
サイズ…505×690cm

フォームを明確にした版画用の原画制作へと移行していくが、その前段で自身のイメージの微細な振幅までを版画技法により再現できることを知ったのは重要な成果であった。

当館で2022年に開催した「草間彌生 版画の世界」が巡回します
■鹿児島市立美術館 2024年9月27日(金)~11月10日(日)
■京都市京セラ美術館 2025年4月25日(金)~9月7日(日)
※その後全国を巡回(会場・会期によって展示作品が異なります)



身近な ART 刺繍

当館学芸員 中澤 聡

いつかのお正月休み、再放送されていたある番組に見事にハマってしまった。イギリス全土から集まった裁縫自慢たちがその腕を競い、アマチュアNo.1の座を目指すお裁縫バトル。

感化されやすい性分で、すぐに何かを作りたくなった。思い出したのは、登園用のバッグに母親が手早く縫い付けてくれた小さな刺繍。番組で優勝者が決まる頃には必要な道具類、それに1冊の刺繍本を入手していた。この本は東欧に伝わるモチーフやパターンを紹介したもので、オーストリアの刺繍家テレーズ・ド・デルモンが19世紀後半にヨーロッパ各地で収集した刺繍の見本コレクションが基になっているのだという。

写真は筆者の刺繍熱が伝播した妹の手によるもの。件の刺繍本に掲載されているブルガリアの図案で、縁取り以外はすべて糸を十字(十)の形に交差させて布に刺す「クロスステッチ」という技法のみで構成されている。

糸を布に刺す、シンプルな行為の先に見える無限の可能性にワクワクと、そして手が止まらなかつた。あまりに熱中しすぎた筆者は立つこともままならない眩暈に襲われた。以降、裁縫箱を封印してしまったが、秋の夜長、まずはワンピースの刺繍からスタートしてみてもよいかもしれない。



Workshop report

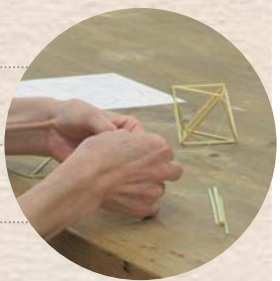
「北欧の神秘」展の関連プログラムとして、講演会とワークショップを開催しました。いずれも受付開始後間もなく定員となるほどの人気で、多くの皆さまに北欧の暮らしや文化に触れていただくことができました。

講演会「北欧のこと、暮らしのこと」



松本市在住のライター・栗原さやかに、ノルウェー移住時の体験などについてお話いただきました。物価高のため自炊はマスト、住宅探しは苦勞の連続、そして訪れる鬱々とした長い冬。なんとなく“憧れの地”というイメージを抱きがちな北欧のリアルな暮らしは意外とシビア。だからこそ、自分の時間を気持ちよく過ごすための合理的な生活術は、明日から実践できそうなものばかり。「完璧な暮らしは求めなくていい」という言葉に、少し肩の力が抜けた参加者の方もいらっしゃったのではないのでしょうか。

ワークショップ「フィンランドのヒンメリづくり」



講師にクラフト作家の上原かなえさんをお迎えし、フィンランドの伝統装飾「ヒンメリ」を作るワークショップを午前と午後の2回実施しました。午前の初級には保護者同伴の子どもから大人まで22名、午後の中級には大人10名が参加。まずは、6cmに切った12本のライ麦の茎に針で糸を通し、正八面体を組み立てることからスタートしました。午前に参加した子どもたちは、繊細な作業に苦戦しながらも家族やスタッフの助けを借りて菱形や箱型などの立体を、午後の参加者は、より高度な幾何学形や連結形を制作。完成したヒンメリを吊り下げた時の皆さんの素敵な笑顔が印象的でした。

今後の教育普及事業

お話 + ミニワークショップ 「ものとの対話 保存修復のしごと」

文化財の「修復」ってどんな仕事？国内外の美術館などで作品の保存修復に携わる講師のお話を聞いたあと、修復体験を行います。

- 講師/森尾さゆり氏 (コンサバター(保存修復師))
- 日時/10月27日(日)13時30分~16時
- 会場/市民アトリエ
- 料金/500円 ●対象/中学生以上
- 定員/先着20名
- 申込/10月25日(金)まで美術館HPで受付
- 共催/松本学生美術会



「香取秀真展」関連プログラム ワークショップ「鑄金に挑戦! 金属を溶かしてオリジナルチャームをつくろう」

コウイカの骨を削って鑄型をつくり、溶かした金属を流してオリジナルのキーホルダーやアクセサリーを制作します。

- 講師/本山ひろ子氏(鑄金家)
- 日時/11月23日(祝) ①午前の部:10時~12時 ②午後の部:14時~16時 ※どちらかを選択
- 会場/講座室・市民アトリエ ●料金/3,000円
- 対象/小学生以上(小学3年生以下は保護者同伴)
- 定員/各回先着10名
- 申込/10月17日(木)から美術館HPで受付

音声ガイド導入のお知らせ

視覚以外のアプローチで美術に触れる機会を増やすことを目指し、7月23日から始まった第2期コレクション展よりガイドアプリ「ポケット学芸員」を利用した音声ガイドを本格的に導入しました。現在、美術館の概要、各展示室やおもな作家の解説に加え、コレクション展で展示中の作品も含め、100項目の日本語の解説文とその音声解説を配信しています。今後は英語での解説文と音声解説を導入する予定です。また、アプリさえダウンロードしていれば、実際に美術館にいなくても音声ガイドを聞くこともできます。ぜひご利用ください。



●利用方法は、まず「ポケット学芸員」のアプリをダウンロード、その後、地域選択で「中部」、施設選択で「松本市美術館」を選択。ガイドもしくはリストで資料に付されている番号を入力もしくは選択すれば、音声ガイドを聞くことができます。

アプリをお持ちでない方

公式サイトはこちら▼
ポケット学芸員 検索
http://welcome.mapps.ne.jp/pocket

